

博士學位論文要約

論文題目： 精神疾患に対するパブリック・スティグマ低減のためのアクセプ
タンス&コミットメント・セラピーによる介入効果の検討
氏名： 津田 菜摘

要約：

パブリック・スティグマとは、個人がその属性を有していることを周囲の人に知られた場合、信用を失墜させたり、社会的地位を貶めたりするような属性を有している人物に対して、当該属性を有していない人物から向けられる否定的なイメージを指す (Goffman, 1963; Corrigan & Penn, 1999)。特に、精神疾患に対するパブリック・スティグマは精神疾患を有する人物の社会復帰を妨げること、パブリック・スティグマを持つ人物の早期受診を妨げることなどから、問題視されてきた (e.g., Scheid, 2005; Vogel, Wade, & Hackler, 2007)。しかし、パブリック・スティグマは自然な思考プロセスの一部であることから完全に排除することが難しく、従来の手法のような否定的なイメージそのものを減らす試みは不適當であることが指摘された。

そこで、本論文では新たな介入方法として関係フレーム理論 (Relational Frame Theory: RFT) を基盤とする ACT の効果を検討することとした。RFT では、スティグマを言語行動として扱う (Benuto, Duckworth, Masuda, & O'Donohue, 2020)。そのため、ACT による介入においてもパブリック・スティグマを排除することを目的とせず、人が自動的に持つ言語行動に気づき、その一部であるスティグマに無意識に左右されないようにすることを目的とする。これによって、結果としてスティグマが軽減されることを狙う。しかし、スティグマに対する ACT には 2 点の問題点が指摘された。2 点とは、1) 先行研究の数が限られており、国内での検討は行われていない点、2) スティグマと最も関係が深いと考えられる刺激機能の変換に着目した効果検討が行われていない点である。さらに、これらの 2 点を検討するためには、潜在的指標を使用して効果測定を行うことで多面的なスティグマ評価を行う必要性が示唆された。

以上より、3 つの点が本研究の目的として挙げられた。まず、1) 日本語版のスティグマ介入のための ACT を実施し、効果検討を行うこと (目的 1)。次に、2) 言語的な反応と実際の現象をあるがままに観察するための介入 (脱フュージョン) に着目し、精神疾患に対するスティグマが持つ特徴や、脱フュージョンのスティグマへ与える影響力を検討すること (目的 2)。さらに、3) 目的 1 で明らかにした日本における介入効果と、目的 2 で明らかにした精神疾患に対するスティグマの持つ特徴を踏まえたうえで、介入内容の改善を行うこと (目的 3) であった。この時、アウトカムは主に顕在的指標と潜在的指標を併用して効果検討を行った。以上の目的を検討するため、本論文では 5 件の研究を実施した。

まず、目的 1 を検討するために、1) 精神疾患に対するスティグマ (顕在的・潜在的) と体験の回避の関係性を検討し (研究 1)、さらに、2) 従来最も使用されてきたスティグマ介入

である教育と ACT の効果検討を行った (研究 2)。その結果, 1), 2) に共通してスティグマと体験の回避には関係性がみとめられなかった。また, 顕在的・潜在的指標に関わらず, 教育と ACT の介入効果に有意な差は示されなかった。つまり, ACT によるスティグマの改善効果が不十分であったことが示された。そこで, ACT によるスティグマの改善効果が不十分であった原因を検討し, 介入効果の改善を行う必要性が示唆された。

次に, 目的 2 の体験の回避以外の要素として脱フュージョンがスティグマへ与える影響力を検討した。まず, 1) ACT パッケージの中から脱フュージョンだけを抽出し, その介入効果を検討し (研究 3), 2) 脱フュージョンを行う際にターゲットとする語の選定のために, “精神疾患”とそれに内包される疾患名, そして否定的なイメージの関係性について検討した (研究 4)。その結果, ACT パッケージで使用された脱フュージョンだけではスティグマ (顕在的・潜在的) 減少の効果がみとめられなかった。一方で, 介入前の時点で脱フュージョンと潜在的指標には弱い相関がみられ, スティグマ介入において脱フュージョンに着目する必要性が示唆された。さらに, 研究 4 ではスティグマの属性を有する人物との関係性に関わらず, “精神疾患”と内包される疾患名の階層性を介入に取り込む必要性が示唆された。つまり, 1) 脱フュージョンのみによる介入効果は不足しているが, 2) 認知的フュージョンがスティグマに関わっている可能性があり, さらに, 3) 認知的フュージョンを行う際には階層性にアプローチする必要があることが示唆された。

そこで, 目的 3 の介入内容の改善を行うために, 階層フレームを用いた脱フュージョンを行うこととした (研究 5)。そのために, まず, 予備的検討として“精神疾患”のような複合語を用いたとしても脱フュージョンの効果が十分に示されるかを検討した (研究 5-1)。その結果, 複合語であっても, 単語と同程度に介入効果が得られることが示唆された。そこで, “精神疾患”を対象に階層フレームを用いて脱フュージョンの効果検討を行った (研究 5-2)。この時測定指標に精神疾患を有する人物との接触場面を想定した行動指標 (座席配置) と, “精神疾患”という語が持つ不快度による測定を追加で実施した。その結果, 不快度と座席配置という限定的な部分において, 介入効果が示唆された。

以上の研究結果により, 本研究の意義が 2 つの観点から示された。まず, 1 点目は, スティグマ介入の新たな選択肢を提案した点である。本研究の結果からは, 教育や接触などの他の介入方法よりも ACT が優れているという明確な結果は得られなかった。しかし, 1) ACT を日本で初めて実践し, 従来の第一選択肢であった教育と同程度の効果が示され, 2) 認知的フュージョンと潜在的スティグマの関係性が示され, 3) 脱フュージョンによるスティグマ介入効果があることが部分的に示唆された。この点は, スティグマに対する介入可能性を示唆するものであり, 新たな介入方法の提案を行った点で意義のある研究であったと考えられる。

2 点目は, スティグマへの介入を行う際に, 潜在的・顕在的指標を用いて多面的なスティグマ評価を実施する必要性を示唆した点である。本研究では複数の指標を用いて効果測定を行ったが, 明確な介入と各指標の変化の対応は明らかにならなかった。しかし, 潜在的指標については, 脱フュージョンによる介入の有効性が示唆されたこと, 同じ顕在的指標であっても座席配置には脱フュージョンによる介入効果が表れる可能性があることが示唆された。以上から, 複数の指標の併用により複雑性の異なる指標を使用することの必要

性が再確認された。さらに、同じ顕在的指標であっても接触場面という文脈によって効果が異なる可能性が示唆された点は本研究の意義であると考えられる。

上述のような意義が示された一方で、本研究には以下の2点について限界点が挙げられた。まず、1点目は精神疾患に対するスティグマへのACTの効果検討が不十分であることである。改善版パッケージの効果検討や、大学生以外の対象者への汎用性の検討が未実施であることが挙げられた。2点目はスティグマの評価指標の問題である。スティグマ指標が先行研究で用いられたものと異なることにより体験の回避とスティグマの関係性が再現されなかった可能性があること、顕在的・潜在的指標の間関係性が明らかになっていない点が挙げられた。

以上のような限界点はあるものの、改善版脱フュージョンを含めたパッケージ介入の効果を従来の手法と比較すること、新たな尺度を作成すること、顕在的・潜在的指標について関係性も詳細検討することで、従来の介入方法とは差別化され、新たなスティグマ介入の選択肢としてプログラムが確立されることが期待される。